

魔女の小唄—『マクベス』の挿入歌

中野春夫

第一フォリオ版（1623年）以来、すべての『マクベス』テキストは「落雷と稲妻。三人の魔女が登場する（Thunder and Lightning. Enter three Witches.）」（F1 *Macbeth*, 1.1.1 SD）というト書きから始まる⁽¹⁾。ところがどの版でも「魔女」であるはずの登場人物たちが自分たちを「魔女」とは呼ばず、「時の三姉妹（F1 the wayward Sisters）」と呼称している。マクベスが頼ろうとしたのも「魔女」ではなく、「時の三姉妹」だった—「俺は明日の朝、時の三姉妹のもとに行く（I will tomorrow,/ And betimes I will, to the weird sisters）」（3.4.154-55）。綴りこそ異なれ、この現象自体はアーデン版やケンブリッジ版など現在の編集版テキストすべてに共通する。ト書きで「魔女」と明示されている以上、今日の私たちにとってそれ以外の可能性は考えられないけれど、「三人の魔女」は本来的に魔女ではなかったのかもしれない。

事実、ト書きを除けば、『マクベス』の劇世界には“witch”という単語は二度しか現れない。そのうちの一つは魔女全般への言及であり（4.1.23）、「三人の魔女」に対して使われるのは一度だけ、それも“cur”とか“rascal”と変わらない罵り語として使われている（1.3.7）。本論はシェイクスピア時代における娯楽文化の魔女表象を接線にとって、『マクベス』の推定初演年代である1606年から最初のテキストが出版された1623年の間に起こった『マクベス』テキストの摩訶不思議な変化を検証したい。

1. 魔女たちの小唄

『マクベス』に登場する魔女は「三人の魔女」だけではなく、劇の中盤である第3幕第5場になると突如彼女たちの「女主人 (mistress)」と称するヘカテが加わる。さらにそのヘカテを彼女の「ちいさな霊 (little spirit)」が舞台奥で小唄を歌い、合流するよう誘い出す—「舞台奥から歌が聞こえる。『こっちへおいで、こっちへおいで、などなど』(Sing within. 'Come away, come away, etc')」(3.5.35.SD)。さらにまた、第4幕第1場では「三人の魔女」とは別の魔女三人組がヘカテとともに登場し、舞台上で小唄を歌って退場する。

魔女というカテゴリーに分類されないのかもしれないが、第4幕第1場では「霊 (Apparition)」と表記される三人の悪霊らしき存在が登場する。さらには「八人の国王ショー」(A show of eight kings)」においてバンクォーの霊も含めて合計九人の亡霊が舞台上に現れる。『マクベス』の劇世界には超自然的能力を持つさまざまな悪役キャラクターがほとんど入り乱れた状態で登場するため、私たちは『マクベス』を悪霊や魔女のデモンストレーション・ショーと表現できるかもしれない。ここで一度整理して、どのような魔女たちがどの場面で登場し、どのような行動をとるのかを示したい。

第1幕第1場 「三人の魔女」のミニ集会（サバト）。「荒野 (heath)」でマクベスに会うことを確認する。

第1幕第3場 「三人の魔女」がマクベスとバンクォーを待ち構える。二人に過去・現在・未来の運命を語る（1.3.50-71）。

第3幕第5場 「三人の魔女」がヘカテと出会う。ヘカテは「三人の魔女」に翌朝「地獄 (the pit of Acheron)」での再会を指示し（3.5.14-17）、ヘカテの「小さな霊」が小唄を歌ってへ

カテを大空へ誘い出す（3.5.34-35）。

第4幕第1場「三人の魔女」が大釜で不気味なものを煮込み、ダンスを踊りながら呪文をかける（4.1.1-38）。途中でヘカテが「別の三人の魔女」とともに現れ、小唄を歌って姿を消す（4.1.39-43）。そこへマクベスが登場し、魔女たちの「主人（masters）」である三人の「霊」から助言と予言を得る（4.1.77-101）。その後「三人の魔女」はマクベスに「八人の国王ショー」を上演して消えていく（4.1.119-33）。

一見するとなんの法則性も感じられないけれど、マクベスとの関係に注目すると魔女や悪霊の登場人物たちは二つのグループに分類することが可能である。超自然的な登場人物たちの中でもマクベスと会話を交わすのは「三人の魔女」と三人の「霊（Apparition）」に限られている。言い換えれば、残りのヘカテや彼女の「小さな霊」、「別の三人の魔女」たちは人間界と接触することもなければ、劇の展開と直接関わることもない。

アーデン版の编者たちが指摘する通り、『マクベス』の魔女の中には大道芸人のようなグループが存在し、ヘカテは小唄を歌うきっかけを作るためだけの登場人物かのように思える（Clark 332）。ならば小唄の導入が第3幕第5場と第4幕第1場の重要な意匠だったことになるが、第一フォリオ版はその小唄の歌詞について出だしのリフレインだけを示し、それ以外の歌詞は「などなど（etc）」で省略している。

ヘカテ おお、よくやった。ほめてやるよ、
みんな、きちんと分け前をくれてやるよ、
さあ、釜を回って、歌うんだ、
妖精たちが輪になって踊り歌うように。
釜に放り込むものすべてに呪文をかけるんだ。
音楽と小唄。「まっ黒い霊、などなど」

(F1 *Macbeth*, 4.1.39-43)

O, well done. I commend your pains,
And everyone shall share i'th'gains.
And now about the cauldron sing,
Like elves and fairies in a ring,
Enchanting all that you put in.

Music and a song. 'Black spirits, etc'

今日私たちが利用する編集版テキストのほとんどにおいてト書きの「小唄」は出だしの‘Black spirits’だけが記載され、残りの部分はすべて割愛されている⁽²⁾。第3幕第5場も同様で、小唄の歌詞は出だしの‘Come away, come away’だけが掲載され、それ以外の歌詞は不明である。その残りの歌詞が判明したのが第一フォリオ版の出版からおよそ半世紀後の1674年、劇作家ウィリアム・ダヴェナントが独自の翻案を採り入れた改作版『マクベス』を出版した時である。このダヴェナント版『マクベス』テキストに魔女たちの小唄の歌詞がすべて印刷されていた。W. W. グレッグは、ダヴェナント版を上演していたヨーク公爵一座が王政復古期以前における『マクベス』の「上演台本 (stage-copy)」を所有していたためにこの歌詞の復活が可能になったと推定している (Greg x)。この時点ではまだ、魔女たちが歌う小唄に『マクベス』の再演や翻案化をめぐる摩訶不思議な出来事が起こっていたことは誰にも知るよしがなかった。

歌詞が判明してからさらにおよそ100年後、ジョージ・スティーヴンズがトマス・ミドルトンによって1610年代前半に執筆されたと推定される『魔女 (*The Witch*)』の手稿版テキストを発見し、1778年にアイザック・リードの経済援助によってそのテキストを出版した (Esche 13-16)。18世紀を代表するシェイクスピア学者であるスティーヴンズはこの劇作品で魔女たちが歌う二曲の小唄がまさしくダヴェナント改作版に収録されているものと同一であることにも気付いていた。今日の私たちが手にする

『マクベス』テキストはほぼ間違いなく（別の言い方をすれば、ほとんどの研究者がそうだと信じているように）シェイクスピアの引退後もしくは死去後のある段階で、ミドルトンが創作した新たな登場人物と小唄、ダンスが組み入れられた改訂版なのである。オクスフォード版の編者たちは本文批評の立場から改訂された現象そのものを強調するけれども（Wells 544 ; Brooke 54-55）、私たちは『マクベス』第一フォリオ版テキストに関する限り、他の劇作家の創作物がシェイクスピアの引退後もしくは没後に組み入れられた点で『ハムレット』のQ2とFや『リア王』のQ1とFの関係とは全く異質な改訂を想定しなければならない。

2. 魔女たちの大釜煮込み

オクスフォード版の編者たちに代表されるように『マクベス』第一フォリオ版テキストをある段階での改訂版と見なす場合、ヘカテなどの新たな登場人物や魔女の小唄などミドルトンに由来する付加物を取り除いたものがシェイクスピアのオリジナル（あるいはそれに近いもの）、すなわち1606年と推定される初演時期の『マクベス』台本になる。端的に言えば、歌って踊り、宙乗りをする大道芸人的な「魔女」たち、スティーヴン・オーゲルの表現によれば観客が見たいと思う「本質的に劇場的な考案物（quintessentially theatrical devices）」（Orgel 162）が登場しないヴァージョンである。逆にヴィカーズ&ダールのように改訂を全否定する研究者であれば、魔女関連の台詞や小唄、仕掛けを含め第一フォリオ版の『マクベス』テキストはすべてシェイクスピアによって1606年頃に執筆されたものと見なす（Vickers 25-27）。改訂否定説の立場をとれば、必然的に『魔女』に収録されている小唄2曲はミドルトンによってシェイクスピアの『マクベス』からそのまま借用されたことになる。

魔女の小唄2曲のうち、『マクベス』の第3幕第5場に収録されている『おいで、おいで（*Come away, come away*）』がもし舞台上で実際に歌

われるとすれば、魔女がはたして何人いるのか、魔女界の上下関係はどうなっているのかはいつの時代の観客にも理解不能であろう。第3幕第5場においてヘカテは「それまで魔女たちによって一切言及されていない新たな登場人物」として登場し（Clark 330）、そのヘカテ以外にも劇世界の中で全く言及されていない四人の魔女が小唄を歌いだす（舞台上に姿を現すかどうかは演出家次第である）。さらに「猫（cat）」の霊であるマルキンまで現れ、マルキンはこれまた小唄の中に組み込まれた歌詞不明の小唄を歌ってヘカテとともに宙に舞い上がる。歌詞の内容は明らかに魔女集会（サバト）の準備である。

小唄

2階からの声　こっちへおいで、こっちへおいで、
ヘカテ、ヘカテ、こっちへおいで。
ヘカテ　行くよ、行くよ、行くよ、行くよ、
大急ぎでいくよ、
大急ぎでいくよ。
スタドリン、どこだい？
スタドリン　[2階から] ここにいるよ。
ヘカテ　バックルはどこだい？
バックル　[2階から] ここにいるよ。
2階からの声　ホッポもヘルウェインもここにいるよ。
足りないのはお前だけ、お前だけ。
おいで、数が揃うように。
ヘカテ　軟膏を塗ってすぐに舞い上がるよ。　[ヘカテ、軟膏を塗る]
マルキン　[2階から] 降りていくよ、分け前もらうため。
キスして、抱きしめておくれ、吸血鬼。[猫の姿の霊が降りてくる]

なぜぐずぐずしているんだ、
おかしいぞ、おかしいぞ、
天の空気はこんなに甘くきれいなのに。
ヘカテ 降りてきたのかい？
 なんの知らせだ？なんの知らせだ？
マルキン これからみんなで宴会だ、
 来るのかい？ それとも、
 来ないのかい？
ヘカテ 飛び立つ準備が今できた。 [猫の霊が歌う]
ファイアストーン [傍白] ほら、ほら、猫が猫語でみごとなソプラノを
 歌っている。

(*The Witch*, 3.3.38-62)

Song.

[Voices.] (*in the air.*) *Come away, come away,*
 Hecate, Hecate, come away!

Hecate *I come, I come, I come, I come,*
 With all the speed I may,
 With all the speed I may,
 Where's Stadlin?

[Voices.] (*in the air.*) *Here.*

Hecate *Where's Puckle?*

[Voices.] (*in the air.*) *Here.*

And Hoppo too and Hellwain too ;
We lack but you, we lack but you ;
Come away, make up the count.

Hecate *I will but 'noint, and then I mount.*

[Hecate anoints herself.]

[Malkin.] (*above*) *There's one comes down to fetch his dues ;*

A kiss, a coll, a sip of blood ;
([Malkin.] *a Spirit like a Cat descends.*)
And why thou stay'st so long
I muse, Imuse.
Since the air's so sweet and good.
Hecate *O, art thou come?*
What news, what news?
[Malkin.] *All goes still to our delight,*
Either come or else
Hecate *Now I am furnished for the flight.*
[Malkin sings.]
Firestone *Hark, hark? The cat sings a brave treble in her own*
language!

この引用からさらに空中飛行の快感を語るヘカテの小唄 14 行と魔女全員によるリフレイン 1 行「教会の鐘も聞こえない、などなど (No ring of bells, etc)」が続くが、『おいで、おいで』の小唄には劇中劇ならぬ唄中唄が「猫の歌」、ヘカテの「空中飛行小唄」と 2 曲も組み込まれている。改訂否定説を採れば、1606 年の『マクベス』初演時にはすでにこれらの唄中唄が挿入されていたことになるが、その場合、シェイクスピアがどういう効果を狙って「猫語」で歌われる小唄やマクベスの運命に関与しないヘカテの「空中飛行小唄」を組み入れたかは永遠の謎になる。一方、ミドルトンの『魔女』ではホッポやスタドリン、マルキンなど上記の魔女たちはすでに第 1 幕第 2 場で登場しており、観客は小唄の内容も含めてこの場面がどのような場面で、魔女たちが何をしようとしているのかを容易に理解できたはずである。

『おいで、おいで』の小唄が示す魔女たちの関係とヘカテの空中飛行 (transvection) は『魔女への鉄槌 (*Malleus Maleficarum*)』以降の正統

的な「魔女」の能力、すなわち悪霊と契約によって獲得される魔女の典型的な特性である（Robbins “transvection” 511-14；Guiley “flying” 128-30）。ヘカテは飛行軟膏を股間に塗って空に舞い上がり、悪霊マルキンが待つ集会（サバト）に出かけようとしている。この場面で観客に分からないのは、なぜヘカテが「三人の魔女」を置き去りにするのか、しかもなぜ（今まで出てきたことのない）別の魔女たちのところでサバトを行おうのか、そしてこの飛行が筋書きとどう関係を持つのかである。

さらに複雑な現象が起きているのが第4幕第1場の大釜煮込みの場面である。第4幕第1場はマクベスを待ち受ける「三人の魔女」がそれぞれの使い魔（familiar）に言及する3行の呪文から始まり、その後に大釜の周りを踊りながら怪奇なものを大釜に放りこんでいく。

第1の魔女 トラ猫がギャーと三回鳴いた。

第2の魔女 三回鳴いた、ハリネズミも一回。

第3の魔女 化物鳥が叫ぶ、「時間だ」、「時間だ」

第1の魔女 大釜をぐるっと回れ、回れ、

毒の臍物ぶち込んで。

お次はヒキガエル、墓石の下で

三十一日と三十一晩、

眠って毒を沁みだしたやつ、

お前が最初に魔法の釜で茹で上がれ。

全員 二倍、二倍、苦しみを濃くしろ、

薪を燃やせ、大釜を沸騰だ。 (*Macbeth*, 4.1.1-11)

1 Witch Thrice the brinded cat hath mewed.

2 Witch Thrice, and once the hedge-pig whined.

3 Witch Harpier cries, ‘‘Tis time, ‘tis time.’

1 Witch Round about the cauldron go ;

In the poisoned entrails throw.

Toad, that under cold stone
Days and nights has thirty-one.
Sweltered venom sleeping got
Boil thou first i'th'charmed pot.
All Double, double, toil and trouble.
Fire burn, and cauldron bubble.

「大釜煮込み場面 (cauldron boiling scene)」として知られるいかにも観客受けしそうな場面であるが、「三人の魔女」が放り込む材料には三人それぞれに特徴がある。第一の魔女の材料は有毒系の動物であり、第二の魔女は爬虫類と夜行性動物の目や舌、羽など体の一部、そして第三の魔女は「魔女のミイラ」や「ユダヤ人の肝」、「トルコ人の鼻」、「売女が溝に産み落とし絞殺した赤子の指」など、異教徒や異端者、教会法違反者の身体を中心に大釜に放り入れている。「三人の魔女」はそれぞれ医学的に有毒なもの、生理的に忌避されがちなもの、宗教的に嫌悪されるものをバランスよく選び、最後に第二の魔女が「ヒヒの血で冷やし」手際よく大釜煮込みの魔法を仕上げる。奇妙なのは一度作業が完了しているにもかかわらず、『マクベス』のテキストが大釜煮込みの繰り返しを要求していることである。

本論の冒頭で引用したヘカテの小唄 (4.1.39-43) は「三人の魔女」が仕上げた大釜煮込みをあたかも最初からやり直すかのような指示をしている—「おお、よくやった。ほめてやるよ／みんな、きちんと分け前をくれてやるよ／さあ、釜を回って、歌うんだ／妖精たちが輪になって踊り歌うように／釜に放り込むものすべてに呪文をかけるんだ」。今日の私たちの感覚では「くどさを感じないのは不可能」(Clark 328) としか言いようがなく、しかもダンスに加えて、小唄も披露されている—「演奏と小唄。『真っ黒な霊、などなど』」。フィッツパトリックが『シェイクスピア劇の食べ物』で指摘するところによれば、この大釜煮込みの台詞では、呪文の効果

にかんし「ダブル・ビア（double beer）」製造における二度蒸留工法のイメージが利用されているらしい（Fitzpatrick 49）。今日ならくどい印象は免れないだろうけれど、「二倍、二倍、苦しみを濃くしろ」という「三人の魔女」の呪文はもう一段階の仕上げ工程を暗示するものとも解釈しうる。シェイクスピア時代の観客であれば、その直後のヘカテの登場は大釜煮込みのフィナーレを期待させたかもしれないし、ミドルトンの『魔女』から類推すると実際の舞台上で披露されたであろう演出は宝塚の「パレード」に似た魔女総出演の輪舞と歌唱である。

ミドルトンの『魔女』では第5幕第2場において大釜煮込みの場面で登場し、こちらでも「熊の尻」やレジナルド・スコットの『邪術の暴露（*The Discoverie of Witchcraft*）』（1584年）に由来する「マーマリティン」（Scot 67）、「昨晚殺した赤髪女の肉3オンス」など珍奇、怪異な材料が登場し、小唄ともに大釜に投入される。

[スタドリ、ホップ、その他の「三人の魔女」が登場]

ヘカテ マーマリティンだ、熊の尻も少しばかり。すぐにだよ！

ファイアストーン ほら、熊の尻にトカゲのしっぽ。

ヘカテ 中に入れな！
取っ取っおいで、昨晚私がばらした赤髪女の肉3オンスを。

ファイアストーン どのあたりだい？おっかさん。

ヘカテ 尻だ、尻か脇腹だ。麻酔はどこにある？

ファイアストーン それも取ってくるよ、おっかさん。

ヘカテ 踊れ、踊れ、おっかさんが呪文をかけている間に。

[容器の周りで魔法の唄]

真っ黒な霊、真っ白な霊、赤に灰色の霊、
仲間に入れ。入れ、入れ、踊ることのできるお前たち

*Black spirits and white ; red spirits and grey,
Mingle, mingle, mingle, and you that mingle may.*

*Titty, Tiffin,
Keep in stiff in ;
Firedrake, Puckey,
Make it lucky ;
Liard, Robin,
You must bob in.*

Round, around, around, about, about!

All ill come running in, all good keep out!

First Witch *Here's the blood of a bat.*

Hecate *Put in that, O put in that!*

Second Witch *Here's libbard's bane.*

Hecate *Put in a grain!*

First Witch *The juice of toad, the oil of adder.*

Second Witch *Those will make the younker madder.*

Hecate *Put in - there's all ; and rid the stench.*

Firestone *Nay, here's three ounces of the red-haired wench.*

All [Witches] *Round, around, around, etc.*

この引用の直前に、愛人アルマキルデスの殺害を依頼しに来た公爵夫人に
対しヘカテは「私と五人の魔女たちに任せておけ」と豪語しており、最初
のト書きが指示するスタドリンやホッポラの登場はこの「五人の魔女」を
指すものと考えられる。『真っ黒な霊』の小唄が『マクベス』の舞台で歌
われたのなら、それなりの数の魔女と大釜という小道具が必要になる。し
かも魔女たちは大釜の周りで魔女らしいダンスが踊れなければならない。

魔女たちの小唄やヘカテがシェイクスピアの創作物ではないと断定でき
る決定的な証拠があるわけではないけれども、1606年の初演時にヘカテ

たちが舞台上で小唄を歌っていたとすれば数々の疑問が生じてくる。「三人の魔女」以外に六名以上の魔女がいるのであれば、第1幕第1場の最初からベン・ジョンソンの『女王の仮面劇（*The Masque of Queens*）』のように魔女十数名を舞台上に登場させてもよかったはずである。もしヘカテに魔女たちの支配者という設定が施されているのであれば、ヘカテが「三人の魔女」を率いてマクベスを待ち伏せして、ダンカン王殺しを教唆した方がはるかに分かりやすい。ルネサンス期の魔女理論において魔女とは一義的に悪の実行犯であるから、魔女たちの支配者であるならばヘカテ自身が直接ダンカン王の命を狙わなければおかしい。この種の疑問は『マクベス』の魔女に関する核心的な現象を暗示している。『マクベス』の劇世界には由来が全く異なる二種類の魔女が存在しているのである。

3. ホリンシェッド年代記の「時の三姉妹」

『マクベス』テキストに関して書誌学的情報はほぼ出尽くしているのかもしれないが、娯楽文化のコンテンツという脈絡にこの劇を置いてみると、従来の『マクベス』研究では見逃されてきた情報をいくつか発見することができる。

たとえば「時の三姉妹」という呼称であるが、その由来がホリンシェッド年代記の記述にあることは判明しているけれども、歴史学者のニック・エイチソンの指摘によれば、1577年初版に収録されている「時の三姉妹」の視覚的情報は「しばしば見過ごされている」（Aitchison 123）。今日ホリンシェッド年代記が参照される場合、図版を割愛した1587年の増補版かエリスの編集版六巻本テキストが通常であるため、この三人がもともと魔女の三姉妹ではなく女神と想定されていたことは『マクベス』批評においてほぼ認識されていない。少なくともシェイクスピアがこの資料を読んだ際、彼の目に飛び込んできたものはエレガントで豪華な装いをしている貴婦人の図像だったのである⁽³⁾。それをシェイクスピアはおぞましい身

なりで「干からびた指 (her choppy finger)」(1.3.44) や「薄い唇 (her skinny lips)」(1.3.45) など超高齢者の外見を持つ性別不明者に変えていた。

『マクベス』の第4幕第1場では二組の「三人の魔女」以外に三人の「霊 (Apparition)」が登場し、この三人がマクベスに対してそれぞれよく知られる助言・予言を語りだす。「第一の霊」は「マクダフに気を付ける」と文字通りの助言を行う一方、「第二の霊」と「第三の霊」は全く逆で「女から生まれたものはマクベスを殺せない」、「マクベスは滅びない、バーナムの森がダンシネインの丘にやってくるまでは」とカウンセラーのような予言を行う (4.1.70-93)。この助言・予言にも材源があり、ホリンシェッド年代記でマクダフへの注意を促すのは「ある魔法使いたち (certeine wizzards)」であり、恐るべき自信を植え付けてくれるのは「とある一人の魔女 (a certeine witch)」(Holinshed 274) である。言い換えれば、シェイクスピアの「三人の魔女」とは『ホリンシェッド年代記』の「ダンカン王伝」に登場する「時の三姉妹」と「魔法使い」、「魔女」という三種類の合成体だったのである。

とりわけ『マクベス』の「三人の魔女」が特異な点はマクベスにとってはるかな未来となるスコットランド王国の姿、すなわちバンクォーを先祖とするスチュアート朝の王国相続を黙劇風に演出することである。

八人の国王ショー、最後の国王は手に鏡を持っている、
そしてバンクォーも登場

マクベス 貴様はバンクォーの亡霊そっくりだ、消えてしまえ！
最初の奴の王冠は俺の目を焼き焦がす。次の奴もだ、
お前の頭も最初の奴と同じ王冠をかぶっている。
三番目も二番目と同じだ、汚い鬼婆ァどもめ、
どうしてこんなものを俺に見せるのだ？

(*Macbeth*, 4.1.120SD-25)

*A show of eight kings. The last with a glass
in his hand ; and Banquo.*

Macbeth Thou art too like the spirit of Banquo ; down :
 Thy crown does sear mine eyeballs. And thy hair,
 Thou other gold-bound brow, is like the first.
 A third is like the former. Filthy hags,
 Why do you show me this?

シェイクスピア時代の観客もマクベスとともに「三人の魔女」演出のスコットランド王国史ショーを観劇することになるが、もちろん材源の『ホリンシェッド年代記』において「時の三姉妹」や「魔法使い」、「魔女」がこの種の王国史スペクタクルを読者に提供する箇所はない。けれども、『ホリンシェッド年代記』のある箇所では他ならぬ歴史編纂家のラファエル・ホリンシェッドその人が壮大なスチュワート家系史を掲載していた。

シェイクスピアに「八人の国王ショー」の靈感を与えたと思われる記述は意外なことにスチュワート朝が始まる三百年以上も前の「ダンカン王伝」に残されている。もう一つ奇妙なことに、『ホリンシェッド年代記』のスコットランド王国史には本来あるべき「マクベス王伝」が存在せず、マクベスの王国統治は「ダンカン王伝」の中に組み込まれている。「ダンカン王伝」は事実上の「マクベス王伝」であり、しかも17年間にわたるマクベス王の統治に関する記述は1050年頃を境として前半部（264-71）と後半部（274-77）の二つに分割されたうえで、その間の2ページ強にわたり「バンクォーとその息子フリーアンス」に由来するスチュワート家系図が延々と解説される。「ダンカン王伝」はマクベス極悪神話とスチュワート王朝物語の裏表二本立てで作り上げられているのである。

読者が「誰が誰と結婚して誰が生まれた」という類の単調な記述を辛抱して読み進めていけば、このバンクォーの子孫たちはロバート二世（在位1371-90）からスコットランド王国の相続権を獲得し、以後九名の国王・

女王を輩出していることが分かる。さらに読者はこのスチュワート朝の王位継承によってスコットランド王国は長男子単独相続制（primogeniture）」のルールを確立させたことも理解できる仕組みとなっている。言い換えれば、シェイクスピアの「三人の魔女」は歴史編纂家、あるいはスチュワート朝のスポークスマンの役割を兼ねていることになる。

「三人の魔女」の登場と関わる『マクベス』の政治的背景も今日ではよく知られていると思われる。1606年初演当時のイングランド国王はスコットランド王を兼ねるジェームズ一世（スコットランド王としては六世）であり、この国王は1590年初めに起こったノースベリック魔女裁判を統括し、その経緯を『スコットランドの出来事（*News from Scotland*）』（1591年）で世に広めた。さらにジェームズは自らの名前と地位を明らかにして1597年に『悪魔学（*Daemonologie*）』を出版し、1603年からはシェイクスピアが経営陣の一人に収まる劇団の新たなパトロンとなった。ジェームズ一世は「八人の国王ショー」の隠れた登場人物として『マクベス』の劇世界の中にも登場する。

マクベス　　まだいるのか？ 七番目か？ もう見たくない、
八番目のやつが出てきた、こいつは鏡を持っているな、
もっともっといえるのか、見えるぞ
王玉を二つ、王笏を三本持っている奴も。
恐ろしい光景だ。 （*Macbeth*, 4.1.127-31）

Macbeth　　Another yet? A seventh? I'll see no more ;
And yet the eighth appears, who bears a glass
Which shows me many more; and some I see
That twofold balls and treble scepters carry.
Terrible sight.

「三人の魔女」はスチュワート朝のスポークスマンであるばかりでなく、

魔女の小唄—『マクベス』の挿入歌（中野）

ジェームズ一世のプロパガンダにも従事していた。

『女王の仮面劇』テキストの編纂者デイヴィッド・リンドリーは、ジェームズが『悪魔学』を自ら執筆するほど魔女に関心を持っていたため、魔女さえ出てくれば「喜んだであろう」と推測している（Lindley 284）。『研究社シェイクスピア辞典』の記述も同様に、「『マクベス』は、王の先祖バンクォーが描かれ、また魔女を登場させて魔術好みの王に合わせるなど、王への追従のために書かれたと考えられている」（『研究社シェイクスピア辞典』、「ジェームズ」298）。一般的にシェイクスピア研究者は、舞台上に登場させることで魔女の実在を保証さえすればジェームズの自尊心を満足させていたと推測してきたが、この推測にも根拠がないわけではない。魔女を舞台上に登場させたシェイクスピアやベン・ジョンソン、ミドルトンたちに共通する現象として、彼らの魔女表象の直接的な材源はジェームズの『悪魔学』ではなく、レジナルド・スコットの『邪術の暴露』であったからである（Lindley 284; Corbin 15）。

4. ノース・ベリック魔女裁判とジェームズ一世

女神か人間かの区別は別として、『ホリンシェッド年代記』の「時の三姉妹」と「魔法使いたち」、「ある魔女」には共通点が存在し、いずれも未来を語れるという点で超自然的な能力の持ち主になる。「時の三姉妹」の一人は「マクベス万歳、いずれスコットランド王になるお方（All haile Makbeth that hereafter shalt be king of Scotland）」（Holinshed 268）と『マクベス』の第三の魔女とほぼ同じ台詞を語り、「魔法使いたち」は『マクベス』の第二の霊とは異なり、「マクダフには用心せよ、いずれお前を殺そうとするのだから（he ought to take heed of Makduffe, who in time to come should seek to desroie him）」（Holinshed 274）と用心すべき理由を明示してくれる。「ある魔女」も同様に二つの予言でマクベスに「誰も自分を殺すことは不可能だ（it was unpossibile for anie man to

vanquish him)」(274) という自信を植え付ける。

『マクベス』の「三人の魔女」が材源から受け継いでいるのが未来を示すことができる超能力者という特性である。この登場人物たちが第4幕第1場の「八人の国王ショー」で一人の国王に焦点を当てたスチュワート王朝史を演出するのもまさしくこの特性の延長と見なしうる。かりに「三人の魔女」が魔女だとすれば、上記の特性は16・17世紀のヨーロッパ社会で通常想定されていた「魔女」とは明らかに異なっていた。

『魔女への鉄槌』の第1巻第2問答で結論付けられる「魔女」の典型的な特性は「最も邪悪なレベルに達する (reach the highest level of evil)」異端者のそれ、すなわちカトリック教会から離脱し、悪魔の「邪悪教会 (the Evil One)」を繁栄させる反カトリック的行為なのである (*Malleus Maleficarum*, Vol. II 71)。

通常知られる悪事に加えて、魔女はカトリック教会からの棄教者を増大させるために以下の四つの悪事を実践しなければならないことは銘記されるべきである。第一にカトリック教会の信仰から完全にもしくは神聖冒瀆の言葉で部分的に棄教すること、第二にわが肉体と魂を邪悪教会に捧げること、第三に洗礼前の赤子を邪悪教会に捧げること、第四にインクビやサクンビとの性的交渉を通じて悪魔のおぞましい行為に耽ること、以上の四点である。 (*Malleus Maleficarum*, Vol. II 72)

Let it be also noted that among other actions they must follow four practices that serve to increase the breach of the Faith : they renounce the Catholic Faith in whole or part with a sacrilegious speech, solemnly devote themselves in body and soul, offer babies not yet reborn [i.e. unbaptized] to the Evil One, and persistently engage in the Devil's filthy deeds through carnal acts with incubus and succunbus demons.

ギリシャ神話のメーディアやキルケーなど、各地域・各時代の社会・文化において様々な悪女や魔術師が形成されてきたが、近代初期ヨーロッパ社会の「魔女（witch/wicca）」が特異な点は悪魔と契約による社会関係を結んで、「契約に基づき悪魔の一団に入り、悪魔の助力によって邪術の現実的な結果を及ぼす」（*Malleus Maleficarum*, Vol. II 49）ことである。このような極悪コンビの存在を認知させることが「真正にして全キリスト教会の命題（a very true and Catholic proposition）」（*Malleus Maleficarum*, Vol. II 49）とされた。この魔女手引書によれば、「魔女なしに悪魔は悪事を犯すことができず、逆に悪魔なしに魔女は悪事を行えない」（*Malleus Maleficarum*, Vol. II 71）。魔女の一義的な特性とは霊的存在である悪魔と人間界において二人三脚を組む異端者のパートナーであった点にある。

かりに『マクベス』の「三人の魔女」がルネサンス期の正統的な魔女であるならば、この劇世界のどの登場人物が悪魔・悪霊に該当するのだろうか？ 第3幕第5場の台詞からするとヘカテは飛行軟膏を塗って空間移動を行う典型的な魔女であり、霊的存在ではない。もしかりに悪魔が『マクベス』に存在するとすれば、ヘカテの小唄で言及される使い魔のマルキンであるが、マルキンと「三人の魔女」との関係は一切分からない。さらに言えば、魔女実在論の強力な擁護者であるジャン・ボダンが強調するような悪魔との性的な臣従関係は明らかに「三人の魔女」には当てはまらない。

現世での報酬を代償として、悪魔は魔女たちに神を捨てて自分を崇拜し、雄山羊などの醜悪な動物の姿に扮した自分の臀部に口づけをするように強いる。(Levack 124)

For reward in this world he [Satan] forces them [witches] to renounce God and to worship him and to kiss his rear in the form of a he-goat or some other foul animal.

『マクベス』の「三人の魔女」は「でっぶり女」に栗をねだる（1.3.3-5）など寒村の妖精ロビン・グッドフェローのような行動をとり、悪魔との性的な接触は一切見られない。もし1606年の初演時に登場した「三人の魔女」が本来的にルネサンス期に想定されていた神学上の魔女ではなかったとすれば、はたしてこの登場人物たちはどのような材源もしくは歴史的背景から生み出されていたのだろうか？

『マクベス』の第3幕第5場でミドルトン作の小唄「おいで、おいで（Come away, come away）」が実際に歌われたとすれば、歌い手のヘカテは宙乗りで舞い上がることになる。シェイクスピア時代のコンテクストで言えば、ヘカテはルネサンス期の魔女らしく飛行軟膏を塗って空間移動を行っていたのである。ところが『マクベス』の「三人の魔女」は非常に特殊な道具を使って移動を行っている。

第1の魔女 あやつの亭主はタイガー号の船長でアレppoに行った。
あたいも篩に乗って、アレppoまでついていく。
尾っぽなしネズミのように、やってやる、
やってやる、やってやる。 (Macbeth, 1.3.7-11)

1 Witch Her husband's to Aleppo gone, Master o'th'Tiger:
But in a sieve I'll thither sail,
And like a rat without a tail,
I'll do, I'll do, I'll do.

魔女が「篩 (sieve)」を船にするという規格外の発想は一見するとシェイクスピアの奔放な想像力の所産のように思える。ところが「篩に乗って海を渡る」魔女を考え出した人物は同時期に他にも存在した。

1590年12月4日から2日間、アグネス・サンプソンというスコットランド人の女性農業従事者が「魔女」の嫌疑で国王ジェイムズ六世の御前で審問を受けた (Normand 141-42)。これがノース・ベリック魔女裁判と

呼ばれる大規模な魔女裁判の始まりであり、アグネスは当初頑強に魔女であることを否定していた。ところがある段階で全裸にされ、体毛すべてを剃られて「悪魔の印」探しが始まると状況は一変した。「印が性器のところに発見され」（*News from Scotland* 311）、その直後からアグネスは（おそらく精神的に均衡を失って）審問官の誘導通りに返答し始める。彼女が真っ先に告白した（させられた）のがサバトへの世にも奇妙な集団移動である。

第一項 上記のアグネス・ Sampson は国王陛下と顧問官たちの御前へ連れてこられ、[ノース・ベリックの] 魔女たちお集會やおぞましい悪行について詮議されると、ハロウィーンの晩に彼女の知り合いの魔女だけでなく総勢 200 名になるその他大勢の魔女と集會を行ったことを認めた。彼女の告白によれば、魔女たちはみなそれぞれ篩に乗って海を渡っていき、大量のワインを飲み、歌いながらどんちゃん騒ぎをしてこの篩でロジアンにあるノース・ベリック教会 [ノース・ベリック沖にある旧カトリック修道院] にたどり着いた。上陸後、魔女たちは手に手を取り合って後ろ下がりの踊りを踊りながら、声を合わせて歌った。

(*News from Scotland* 314-15)

Item, the said Agnes Sampson was after brought again before the King' s Majesty and his council, and being examined of the meetings and detestable dealings of those witches, she confessed that upon the night of Allhollon Even last, she was accompanied as well with the persons aforesaid as also with a great many other witches to the number of two hundred; and all they together went to sea each one in a riddle or sieve, and went in the same very substantially with flagons of wine, making merry and drinking by the way in the same riddles or sieves, to the kirk of North Berwick in Lothian; and that they had landed, took hands on the land and

danced this reel or short dance, singing all with one voice…

魔女の空中移動は飛行軟膏によって可能となるとされ、『マクベス』の第3幕第5場において歌われる『おいで、おいで』の小唄でもヘカテは「軟膏を塗って、空に舞い上がる」。図像的には魔女たちは逆向きの箒を跨るか、雄山羊の背に乗って空中を移動するのが通常であり、「三人の魔女」のように篩で海上を航海するという移動法は例外中の例外に属する。その摩訶不思議な移動法を考え付いたのがアグネス・ Sampson を尋問した審問官の誰かなのである。

「三人の魔女」とノース・ベリックの魔女たちとの間には興味深い共通点がいくつも存在し、その一つはどちらも宴会とダンス、小唄が大好きなことである。またどちらも魔法を使う時に猫や毒蛙などの小動物、あるいは「死んだ人間の一部」(*News from Scotland* 316) などを利用すること、さらに人を殺害するときには（呪いなどではなく）、嵐という物理的手段を用いる (*Macbeth* 1.3.12-18; *News from Scotland* 317)。なかでも興味深い共通点が両者ともジェームズ一世のプロパガンダを行う役割を担わされていることである。

『スコットランドからの知らせ』においてアグネス・ Sampson たち魔女の一行は旧修道院の廃墟があるノースベリック沖の孤島に上陸すると、「人間の姿をした」悪魔の出迎えを受ける。彼女たちは悪魔の臀部に口づけをしてから悪魔の説教を受けるが、その説教の中で悪魔はこのほかスコットランド国王に対して激しい非難を行った。

その際、魔女たちはなぜ悪魔が国王陛下に強い憎悪を抱くのか尋ねたところ、悪魔はこの国王こそこの世で悪魔最大の敵であるからと返答した。魔女たちの告白と尋問はすべて記録に残されている。

(*News from Scotland* 315)

At which time the witches demanded of the devil why he did bear

such hatred to the king, who answered, by reason the king is the greatest enemy he hath in the world. All which their confessions and depositions are still extant upon record.

アグネスの自白を通じて見えてくるのは、最終的にジェイムズが何を「悪魔」に言わせたかったかである。「悪魔最大の敵」とはまさしく悪魔に最も恐れられる王国の守護者、すなわち王国から悪の勢力を一掃する至高の魔女ハンターとしての権威付けの表現に他ならない。

5. 『悪魔学』と1604年の魔術禁止令

ローレンス・ノーマンドとガレス・ロバーツの共著が指摘するところによれば、ノース・ベリック魔女裁判の特異性は第五代ボズウェル伯フランシス・ハップバーンのジェイムズ六世に対する政治的敵対行為が魔女の反乱行為と結びつけられ、ボズウェル伯と結託した大規模な魔女グループの存在が想定されたことにある（Normand 3-6）。この魔女グループの認定にあたり、国王ジェイムズ自らが統括する審問会議は結果として大陸系の「契約（Pact）」魔女理論を導入し、魔女の線引きを従来と大きく変えることになった。バーバラ・ネイピア（Barbara Napier）はアグネス・ Sampson の証言を根拠に、悪魔との関係だけを罪状として処刑されたが、彼女はスコットランド王国最初の大陸系魔女、すなわち邪悪な行為は一切行わなくとも処刑される「契約」タイプの魔女である（Normand 91）。

ノース・ベリック魔女裁判が実質的に終結してから4年後の1597年、ジェイムズ六世は『悪魔学』を出版し、魔女の存在を力説するとともに魔女の能力を自らの審問での情報に基づいて解説した。興味深いのは、王国統治者としてのジェイムズが魔術に関する非合法と合法の境界線を明確に引き、第一部で明文化していたことである。ジェイムズにとって非合法であるべき超自然的行為には二種類あり、一つは占星術などの「魔術

(magic or necromancy)」、もう一つが呪文や降霊術などの「邪術 (sorcery or witchcraft)」になる。ジェームズによれば、魔術師 (magicians) も占星術師 (necromancers) も悪魔と何らかの関係を持つことによって、超自然的な現象を引き起こす術あるいは超自然的現象の情報を知りえたと思ないうる職業である (*Daemonologie* 361-72)。ジェームズによれば、当然のことながら魔術師も占星術師、降霊術師の類はすべて悪魔の協力を得ている点で厳罰に処されるべきであるが、第一部の結びでは以下のように悪魔の協力を得たと間接的に認定される人間にも「魔女」の烙印が押されることになる。

魔術師や占星術師について私が語ったことは、彼らに相談したり、尋ねたり、もてなしたり、雇用しているものにも当てはまる。この輩に相談した者たちに起こることはその多くがたどった悲惨な末路からも明らかである。悪魔はサウルに語った予言と同じような甘い知らせを誰にも語りかけるのだから。 (*Daemonologie* 378)

And I say of them [these magicians and necromancers], so say I the like of all such as consult, enquire, entertain, and oversee them; which is seen by the miserable ends of many that ask counsel of them. For the devil hath never better tidings to tell to any than he told to Saul.

アグネス・サンプソンに「相談した」ことを理由として自ら下したバーバラ・ネイピアへの死刑判決を念頭においた一文であると思われるが、ジェームズ個人が抱いていた「魔女」の適用範囲が想像以上に広く、かつあいまいであったことを示す恐るべき個所である。

エリザベス一世の死去に伴って、1603年にイングランド王国を相続したジェームズは翌年に議会を招集し、新国王として大きな関心を抱いていたと思われる魔術禁止令（1563年制定）の改正に乗り出す。ロッセル・

魔女の小唄—『マクベス』の挿入歌（中野）

ロビンズが指摘するように、この年からイングランド王国はスコットランド王国とともに魔女の認定に関し、大陸の契約理論へと大きく舵を切ることとなった（Robbins “James I” 277）。新たな魔術禁止令でひときわ目立つのが、ジェイムズ個人の魔女認定基準とほぼ同じ表現を持つ一文である。

いかなる目的であれ、邪悪な霊に助言を得るか、契約を交わしたか、もてなしたか、雇用するか、あるいは食事を供したり、報酬を与えたものは... 重罪犯として死刑に処され、聖職者及び聖域の特権は適用されない。

... if any pson or person... shall consult conenant with entertaine employ feede or rewarde any evill and wicked Spirit to or for intent or purpose... shall suffer pains of deathe as a Felon or Felons, and shall loose the priviledge and benefit of Cleargie and Sanctuarie.

(The Statutes of the Realm Vol.4, Part 2, 1 Jac I. c. 12)

『悪魔学』で主張された悪魔の間接的な協力というあいまいな基準はさすがに見送られたらしいが、新たな魔術禁止令は「悪霊」との直接的な利害関係という判定基準を明確にして、大陸系の契約理論をイングランド王国に導入することとなった。

以上のコンテキストから『マクベス』をとらえてみると、1606年のシェイクスピア・オリジナル版『マクベス』にはまさしくジェイムズが想定していた新たなタイプの「魔女」が存在していたことが分かる。「時の三姉妹」と自らを呼ぶ正体不詳の超自然的存在（すなわち霊的存在）がマクベスに魅惑的な予言を語り、言われた当人はその予言を信じて極悪非道の殺りくを繰り返し、悲惨な末期を迎える。マクベスは第4幕第1場で自らの意思で「三人の魔女」を訪れ、さらなる助言と予言を乞い求める。

マクベス

明日出かける、
早朝だ、時の三姉妹に会いに行く。
もっと聞き出してやる。もう少々ひどい手段でも
使う覚悟はできている。最悪だって構うものか、
自分のためならば正義や大義などどうでもいい。

(*Macbeth*, 3.4.153-57)

I will tomorrow,
And betimes I will, to the weird sisters.
More shall they speak: for now I am bent to know
By the worst means, the worst; for mine own good,
All causes shall give way.

『マクベス』とは1606年のコンテキストで武勇の誉れ高いマクベスが悪霊の誘惑によって「魔女」に変身する悲劇、すなわち1604年の魔術禁止令改正で生まれた新たな大陸系魔女を主人公とするお芝居だったのである。言い換えれば、この悲劇は主人公が「魔女」に変身していく過程を観客が目撃するという、魔女生成のプロセスを生々しく表現するお芝居だった。

結び

今日でも「魔女」はディズニーランドや『グリム童話』の老婆タイプから、『魔女っ子メグちゃん』、『魔女の宅急便』、『メアリーと魔法の花』の可愛いタイプまで多様な表象で登場する。『マクベス』も同様であり、1606年のオリジナル版上演から10年ほど経過した後は様々な魔女が新たに付け加えられることになる。『マクベス』の魔女表象はその意味でその時代時代の娯楽嗜好を投影する典型的な産物だったのである。

註

- (1) 第1フォリオ版からの言引用はノートン・ファクシミリ版による—*The Norton Facsimile: The First Folio of Shakespeare Based on Folios in the Folger Shakespeare Library Collection*. The Second Edition, New York: W. W. Norton & Company, 1996. 本文中で個別的に言及されている第一フォリオ版からの引用を除き、シェイクスピア劇の引用はすべてRSC版に拠っている——Jonathan Bate & Eric Rasmussen, eds. *William Shakespeare Complete Works*. Basingstoke: Macmillan, 2007.
- (2) 例外はオクスフォード全集版とオクスフォード・ワールドクラシック版である。後者では魔女は「第六の魔女」まで登場する。
- (3) この図版はジェフリー・ブローの材源集第7巻494ページに収録されている。

[本研究はJSPS科研費・基盤研究C「シェイクスピア劇の小唄—テキストに埋め込まれた聴覚的連想イメージコード」(研究代表者・中野春夫/課題番号17K02514/研究期間H29-H32)及びJSPS科研費・基盤研究C「16世紀イングランド文学における浮浪者の表象研究」(研究代表者・中野春夫/課題番号26370290/研究期間H26-H28)の助成を受けた成果である。また本論文の第2節はシェイクスピア祭・没後四百周年記念大会の特別講演「シェイクスピア劇の小唄—艶歌、怨歌、哀歌」(2016年4月23日、慶応大学、日本シェイクスピア協会主催・日本英文学会共催)の一部を発展させたものである]

引用文献

- Aitchison, Nick. *Macbeth: Man and Myth*. Stroud: Sutton Publishing, 1999.
- Brooke, Nicholas, ed. *William Shakespeare: The Tragedy of Macbeth*. Oxford World Classics. Oxford: Oxford University Press, 1990.
- Bullough, Geoffrey. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. 8 vols. London: Routledge and Kegan Paul, 1973. Vol. VII: Major Tragedies.
- Clark, Sandra and Pamela Mason, eds. *The Arden Shakespeare: Macbeth*. The Third Series. London: Bloomsbury, 2015.
- Corbin, Peter and Douglas Sedge, eds. *The Revels Plays Company Library: Three Jacobean Witchcraft Plays*. Manchester: Manchester University Press, 1986.
- Fitzpatrick, Joan. *Food in Shakespeare: Early Modern Dietaries and the Plays*. New York: Ashgate, 2007.
- Greg, W. W., & F. P. Wilson, eds. *The Witch*. Malone Society Reprints. Oxford: The Clarendon Press, 1950.

- Guiley, Rosemary Ellen. *The Encyclopedia of Witches and Witchcraft*. New York: Checkmark Books, 1999.
- Holinshed, Raphael. *Holinshed's Chronicles of England, Scotland, and Ireland*. 6 vols. 1808. New York: AMS Press, 1965. Vol. V: The History of Scotland.
- James VI. *Daemonologie*. Ed. Lawrence Normand and Gareth Roberts. *Witchcraft in Early Modern Scotland : James VI's Demonology and the North Berwick Witches*. Exeter : University of Exeter Press, 2000. pp. 353–430.
- Jonson, Ben. *The Masque of Queens*. Ed. David Lindley. *The Cambridge Edition of the Works of Ben Jonson*. David Bevington, Martin Butler, and Ian Donaldson, eds. 8 vols. Cambridge : Cambridge University Press, 2012. Vol. 3, pp. 281–350.
- Levack, Brian P. ed. *The Witchcraft Sourcebook*. London : Routledge, 2004.
- Lindley, David. 'Introduction' of *The Masque of Queens*. *The Cambridge Edition of the Works of Ben Jonson*. David Bevington, Martin Butler, and Ian Donaldson, eds. 8 vols. Cambridge : Cambridge University Press, 2012. Vol. 3, pp. 283–87.
- Malleus Maleficarum*. Ed. & Trans. Christopher S. Mackay. 2 vols. Cambridge : Cambridge University Press, 2006. Vol. II : The English Translation.
- News from Scotland*. Ed. Lawrence Normand and Gareth Roberts. *Witchcraft in Early Modern Scotland : James VI's Demonology and the North Berwick Witches*. Exeter : University of Exeter Press, 2000. pp. 309–26.
- Normand, Lawrence and Gareth Roberts. *Witchcraft in Early Modern Scotland : James VI's Demonology and the North Berwick Witches*. Exeter : University of Exeter Press, 2000.
- Robbins, Rossell Hope. *The Encyclopedia of Witchcraft and Demonology*. London: Spring Books, 1959.
- Scot, Reginald. *The Discoverie of Witchcraft*. Ed. Montague Summers. Suffolk : John Rodker, 1930.
- Statutes of the Realm, The*. 11 vols. 1824. New York: William S Hein & Co., 1993.
- Vickers, Brian & Marcus Dahl. "Disintegrated: did Thomas Middleton really adapt *Macbeth*?". *TLS*. 28 May 2010.
- Wells, Stanley and Gary Taylor with John Jowett and William Montgomery. *William Shakespeare A Textual Companion*. Oxford: Clarendon Press, 1987.